

# School of Father 父の学校



## 父が生きると 家庭が生きる

- 開催日&会場 2011年3月4日(金)~6日(日)
  - ・4日(金) 6PM~9:30PM 会場: IJCC
  - ・5日(土) 9AM~8PM 会場: ホノルル教会
  - ・6日(日) 2PM~7PM 会場: マキキ教会
- 参加費用 \$130 (全期間参加のみ、部分参加は出来ません。  
食事、テキスト代、ユニフォーム代を含む)
- 参加資格 男性 (テーマは「父」ですが、参加は男性どなたでも)

「父の学校」とは、男性が社会や文化、父親から受け継いでいるかもしれない良くない影響を排し、男性として、夫として、父親としての正しい役割を仲間と共に学び実践する場所です。

この三日間は、あなたの人生にとって、家庭にとって大きな祝福への突破口となるでしょう。。

- 問い合わせ [chichinogakkou@gmail.com](mailto:chichinogakkou@gmail.com) 277-5849 (関) 372-6127 (冬木) まで。

### ——申し込み書——

氏名 \_\_\_\_\_ 生年月日 \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日 Eメール \_\_\_\_\_

職業 \_\_\_\_\_ 出席教会 \_\_\_\_\_ 電話 \_\_\_\_\_

ユニフォームサイズ (日本仕様) S M L LL \_\_\_\_\_ (丸をしてください)

この申し込み書を切り取り Honolulu Christian Church /Japanese Dpt  
2207 Oahu Ave Honolulu .HI 96822 までチェック \$130 と共に郵送ください。

チェックのあて先 「CJCC」 左下欄に「父の学校」と明記してください。

第一次締切日: 1月28日

## 「父の学校」の体験談

広山国臣（ひろやま くにのみ）

東京2期終了生の広山国臣と申します。62歳です。私は高校までを鹿児島で過ごしました。大学を期に東京に出て、卒業後は静岡県にある企業に勤務しました。娘2人の4人家族です。長女夫婦とともに、全員大和カルバリーで礼拝生活を送っています。

結婚した時、妻は既にクリスチャンでしたが、妻の思いを無視し、教会に行くこともなく普通の生活でした。娘2人は、長女が高校3年、次女が中学2年の時、一緒に受洗しました。私はその翌年、被害妄想のひどかった母の癒しを通して、48歳の時、主を受け入れました。

### ●家族を暴力で押さえつけて

私の30、40歳代は高度成長期で、マイホーム主義が軽視され消費が美德とされた時代です。企業戦士で、家庭を顧みず一生懸命働きました。「男は外で働き、妻は家庭を守る」、と言う価値観を持っていました。仕事優先で家族のことは後回し、家族のために働いているのだからいいと思っていました。仕事に追われ、いつもいらいら、よく酒を飲みました。すぐカッとなり声を荒げ、妻や子供に暴力を振るいました。具体的に覚えている事として、このようなことがありました。次女が3歳位の時、頭を洗ってやっていて、娘の目に石鹸が入って嫌がったことがありましたが、「それくらい我慢しろ」と怒って、押さえつけ無理やり洗ったことがあります。上の娘に算数を教えている時、分からないとイライラし、頭をぶったことが何度ありました。言うことを聞かない時、夜、車で淋しいところに連れて行き、おどしながら説教したこともあります。今から思えば当然の結果ですが、40代の後半、娘達が思春期を迎える頃から私との関係がおかしくなり、やがて次女が引きこもりを始めました。それでも問題の本質が分からず、娘達の態度が目にも余るとよく怒り、暴力もふるいました。妻とも衝突し、家族のためにこんなにまじめに働いているのに、なぜ妻も娘達も不満を持つのか全く分かりませんでした。しかし、娘の状態が一向に好転しないので心配になり、牧師先生に相談したり、聖地旅行をしたりしました。

そういう中で、断食祈禱院に行った時、分かったことが一つあります。娘達が元気していると機嫌が良いのですが、弱音を吐いたりすると、私はいい顔をしませんでした。これまで、娘のことを祈ってきましたが、「何か自分に、問題があるのではないか」と思い、断食祈禱院に行きました。

### ●「泣きたい時は泣いてもいい」

山を降りる前日、午後からずっと祈り、夜になって真っ暗な中で祈っている時、娘の言葉が響いてきました。「もう、自分は何も出来ない！ 昔の自分を期待しないで！」この言葉は娘がよく言っていた言葉でした。いろいろな事に挑戦し、明るく、元気だった娘が本来の娘だとずっと思っていました。ですから、「娘を、元気な元の状態に戻してください」といつも祈って来ました。何もしないでいる娘を認めたくなかったのです。娘の言葉が響いてきた時、「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」と言うみ言葉と共に、十字架の下で泣いている娘と一緒に涙を流されているイエス様の姿が浮かんできました。「ああ、泣きたい時は泣いてもいいんだ。何も出来ない時だってあるんだ・・・」「ああ、娘は今のままでいいんだ・・・」と思いました。娘がとても愛おしくなり、涙が溢れて止まりませんでした。その時、「男は泣いてはいけない、強くあれ・・・」という考えにずっと縛られて来た自分に気づきました。

しかし、まだその時は、私は家庭の長としての自分の役割が分かっていませんでした。この問題の本質を明確にしてくれたのが「父の学校」でした。「父親の影響力」の中で、「男は外で働き、妻が家庭を守る」という私の考えは父から受け継いだものでした。子供の頃、「いやだ」と思っていた父の性格を見事に受け継ぎ、父親になって全く父と同じことをしている自分に気がつきました。外面と内面とを無意識のうちに分けていました。仕事のことを、一切妻に話したことがありませんでした。どうしようもない時は、直接帰宅せず、いつも酒を飲んで酔っ払って帰っていました。自分の弱さを見せたくなかった。「男は泣いてはいけない。強くあ。・・・」というこの世的な男性文化にどれほど汚染され、束縛されていたかに気づきました。「家族には経済的なサポートをするだけで良い夫である」と思っていたのは勝手な思い込みでした。妻の気持ちを理解しようとせず、娘達の人格も尊重せず自分の考えを押し付けていました。サポートしたくても受け入れない私に対し、「一生懸命祈っていた」と後になって、妻から聞きました。

### ●新しい父親像を学ぶ

父の学校に参加して初めて、家庭における父親像が明確に示されました。最も大切なことは、「家長として正しく家庭を建てること」だと分かりました。「私が引きずってきた価値観を私の代で断ち切ろう」と決断しました。人生の目標が変わり、進むべき方向が明確になりました。「家庭の祝福の基は父親にあり、妻を愛することである」ことが明確に示されました。妻に対する感謝の気持ちが湧いてきました。それ以来、娘達との関係が徐々に変わりました。次女が、実に13年ぶりに一緒に食事をするようになり、毎日の出来事を私と話すようになりました。これほど、嬉しいことはありません。娘に「最近、目が輝いているね」と言ったら、「お父さんが活き活きして、とても嬉しい」と言ってくれました。娘たちは悲しい思いをしましたが、二人とも、これからその経験が活かされると信じています。やりたいことを思い切りやって欲しい。娘達を応援します。父の学校を通して、主は韓国、日本の多くの兄弟方を与えてくださいました。

奉仕を通し、共に賛美し、悔い改め、祈る時、今も生きて働かれる、愛なる神様を身近に感じます。「父の学校を通していただいたこの素晴らしい恵みを日本中のお父さん達に伝えたい」その思いが湧き上がっています。「主よ、私が父親です」

ご静聴ありがとうございました。

2007.12.8 横浜3期「父の学校」でのあかしから